「主イエスを信じる：どんなイエスを？」
ヨハネによる福音書 6章60〜71節

初めに、面白いお話を一つ、御紹介いたしましょう。ある教会の小学生の男の子のお話で、その日、教会学校の小学科を終えて家(いえ)に戻ったその子がお母(かあ)さんと交わした会話です。おかしくも、どこか聖書の読み方をいま一度考えさせられるような、そんな感触も感じられるやり取りです。

いかにも現代っ子の男の子が教会学校から帰ってきました。「お帰り。今日(きょう)は、教会学校で何を勉強したの？」 お母さんが尋ねました。と、男の子が答えます。「え〜と、モーセのこと勉強した。神様がモーセを前線に送って、イスラエルの人たちをエジプト軍から救出したっていうお話だよ。みんなが紅海(こうかい)っていう所に来たとき、モーセがエンジニアを呼んで、海を渡れるように浮き橋を造らせたんだって。それで、全員が海を渡れたんだけど、エジプトの軍隊が戦車で後(あと)を追いかけてきてね、同じ橋を渡ってくるんだ。それでね、それに気づいたモーセがさっと 無線で本部に連絡し、潜水夫を橋の下に潜らせて、そして 橋を爆破させたんだって。それで、イスラエルの人たちがみんな助かったっていうお話だった」

それを聞いたお母さんは怪訝(けげん)な顔をして聞き返しました。「それ、本当に 先生がそうおっしゃったの？」 すると、男の子はこう言って答えたのだとか。「まぁね。だって、そのとおり言ったって 信じっこないじゃん」

イスラエルの人々が奴隷のエジプトを脱出して紅海(こうかい)の海に来たとき、天からの奇跡が起きて エジプト軍が水に飲み込まれてしまい、そしてイスラエルの民が助かったという あの有名な紅海渡渉(としょう)の物語ですが、そのままじゃとても信じてもらえそうもないので ちょっと話を作り変えて、という いかにも現代っ子らしい男の子の なかなか手の込んだ笑い話の一節でした。

今月の聖書の箇所は、「弟子たちの多くの者はこれを聞いて言った。『実にひどい話だ。だれが、こんな話を聞いていられようか』」(60) との、吐き捨てるような言葉から始まっています。なんともひどい話だ。そんな話、誰が信じられるかい、というわけです。しかも、あれやこれやの奇跡物語ならまだしも、事はどうも そう簡単・単純に済まされるようなものでもなさそうで、どうやらそこには、信仰の大切な事柄に触れる問いが置かれているように感じられます。男の子のお話にもそれなりに考えさせられるところがあり、それはそれで面白くはあるものの、とはいえやはり、笑って済ませられるようなものではない なにがしか重要なことがここで示唆されている。手を入れ、

作り変えて、そして なんておかしなお話云々では終わらない、そんな問題がここには置かれているように思われます。

主イエスの話を聞いた人々は「実にひどい話だ」と言って、その苛立ちを露わにしました。ただ、ここで「ひどい」というのは、言ってることがまるで分からない、理解できない、というのでも必ずしもないようです。これまで何度か、こう申し上げたことがあるように思います。人々は心の目が閉じているので、主イエスの言わんとされるところが読み取れない、というように。ですが、ここに至って、それは一方ではそうだけれど、しかし実は それだけでもないらしい、と気づかされます。つまり、より正確に言えば、今回の様相はどうも、聞いてることはそこそこ それなりに分からないわけでもないけれど、けど、そんなこと 受け入れられるわけないだろ。そんなこと、誰が信じられるか、ということのようだからです。

新約聖書はギリシア語で書かれていますが、その原語のギリシア語では、この「ひどい（σκληρός）」というのは元々、堅い木株の有り様を、しかも そこに節がたくさん集まってゴチゴチと堅くなっている様を意味したといいます。言い換えれば、そのあれこれがそこそこ それなりに分かるからこそ、かえって「そんなの御免だね」というわけです。関係の専門家らはそのように見ているようですが、だとしたら、イエス・キリストを追いかけてきた者たちは、主イエスが何を言わんとされたのか、そのこと自体は全く分からないわけでもなかった。自分は天からのパンであって、これを自身の内に受け入れる者は真のいのちに生かされる、と 主イエスがそうおっしゃったこと、そのこと自体はそこそこ分かっていたのかも。それが何のことか 全く見当がつかなかったからではなく、そうではなくてむしろ、イエス・キリストの言わんとされたことが、すなわちその真意がそれなりに届いていたからこそ、だから 彼らは主イエスのもとを去っていった。事の実際は どうやら、そんなふうだったのかもしれません。そのようにして、66 節は次のように記しています。「このために、弟子たちの多くが離れ去り、もはや イエスと共に歩まなくなった」

考えてみれば、人はたしかに、事をよく理解していない間は なんとなく心を惹かれて、その場に出向いたり、集ったり。さらには、活動を共にしたりもします。けれども、あるとき 事の真相が明らかになったり、本来の趣旨や真意が分かったりすると、それ以降、そこから距離を置いたり、その場を離れ去って、そこにはもはや近づかなくなったり。そうしたことがたしかにあるのではないでしょうか。イエス・キリストとはそもそも、どういうお方なのか。そのメッセージの中心はいったい、どういうものなのか。そうしたことが真っすぐ突き出されたとき、主イエスのもとに 人がさらにも群がるかと思いきや、事は逆で、人々は次々とそのもとを去っていったといいます。実際、それが聖書の記す現実でもありました。

いみじくも、「弟子たち」という呼び方がここで、二度三度と繰り返されています（60、61、66）。これはもちろん、12 弟子のことではありません。イエス・キリストを信じるということがどんなことを意味するのか、そのことに思いをあまり深く至らせずに後を追いかけてきた、いわば 心

情的な追っかけとでも言ったらよいでしょうか。そのような人たちのことです。字面(じづら)の呼称は同じものの、それまで出てきたそれとは少しばかり、その意味合いが違っています。そして、そのような意味でのその「弟子たち」という言い方が、ヨハネによる福音書ではここで初めて出てくる。そして、初めて出てきたそのところから、人々が異なる方向へと分かれていきます。主イエスになおも従う人たちと、主イエスに背を向け、そのもとを去っていく人たちとに、です。そのようにして また、ここから事態が大きく変わり始め、主イエスに対する人々の敵意が増していく。そして ついには、十字架の死へと、主イエスを追いやっていくことになります。なんという皮肉でしょうか。なんという悲劇でしょうか。そんな、なんともやるせない思いを憶(おぼ)えさせられるのはこの私だけでしょうか。たしかに、それまでとは違う、より緩い意味合いでのそれではあります。とはいえ、呼称はどちらも同じく「弟子たち」。呼び方を同じくするその彼らの「弟子たち」というその言い回しが出たそのところから、しかし、イエス・キリストの十字架への歩みが緊迫の度を増してゆくのでした。そこにはやはり、何事か 大切なメッセージが隠されているように思われてなりません。実際、信仰にもいろいろなものが見られます。場を取り巻く空気やそこに漂う気分から、時の時流やそこに生まれる時代精神の如(ごと)きもの。はたまた、自(みずか)らの欲求や願望といったものまで。そうした様々がそこに込められ、信仰という形で表わされることもあるようです。もちろん、それらのどれもが間違いというわけでもなく、そもそも、私たちは誰しも そうしたものから全く自由ではいられない、とも言えるでしょう。そうではなく、また そうであればこそかえって、主イエスの意図される信仰とはどんなそれなのか、意識して そこに目を凝らし、それを読み取って聴き取ろうとすることが重要のように思われてなりません。イエス・キリストのいのちに生きてあずかることが聖書の語る信仰だとしたなら、そのように思われるのですが、いかがでしょうか。

それもこれも、彼らが躓(つまず)いたことから、すなわち イエス・キリストの言葉に躓いたことから始まりました。主イエスは言われます。61 節、「あなたがたはこのことにつまずくのか」。すなわち、「わたしが命のパンである」と言われた主イエスの その 6 章 22 節以下の言葉に、人々はまず躓いた。それは詰まるところ、前回まで見てきたように、イエス・キリストの「十字架の死」を示唆するものでした。人々はそれに、まず躓きました。そして、これを受け、主イエスはいま一度、言葉を重ねられます。62 節、「それでは、人の子が〔すなわち、このわたしが〕もといた所に上(のぼ)るのを見るならば・・・」と。そうしたら もっと躓くであろう、というわけです。なぜなら、それはまたしても「十字架の死」に関わることであり、そこを中心にして起こされることだからでした。つまりは、こういうことです。「もといた所に上(のぼ)る」とは、まず 十字架の上に上げられること、そして その後(のち) 甦(よみがえ)られて、神の御許(みもと)に引き上げられること。その全体を指すものですが、とりわけ ヨハネの福音書で「上(のぼ)る」と言うとき、また「上げられる」と言うとき、それはいつも「十字架に上げられる」ことを抜きにしては語られない。それどころか、十字架がその中心に置かれている、ということです。十字架に高く上げられることを通して天に向かい、そして 神の御許へと引き上げられる。「父よ、わたしの霊を御手(みて)にゆだねます」(ルカ 23：46)。主イエスは十字架の上でこうおっしゃって息を引き取られますが、これなどまさに、そのことを物語っている

と言えはしないでしょうか。

しかし、それにしても、それがどうして さらにも躓きになるのでしょうか。それは、当時のユダヤの人々にとって、十字架につけられて殺された者が神からの救い主などとは とうてい考えられなかったからです。そのような死に方をした者はむしろ、神から呪われた者であって、神に祝福された人などであろうはずがない。そう考えられていたからでした。救い主は力に溢れ、見た目にもそれらしく堂々としていて、華やかでもあるはず。そう 彼らは信じ、そして 目に見える同じような幸いをこの自分たちにも、と その救い主に期待をしていました。自国を占領支配するローマからの解放はその最大のものと言えるでしょう。が、それだけでもない。そうした 目に見える具体的願望の期待は日々の日常にまで浸透していました。健康を支えられ、富や誉れを恵まれ、そのようにして祝福された幸福な暮らしができるようにと、それらを保証してくれる 力の救い主を待っていたからです。そしてそれは、思うに、今日のこの私たちの現実とも必ずしも無縁でないように思われるのですが、いかがでしょうか。家内安全、商売繁盛、健康増進、大願成就・・・云々と、私たちもまた目に見える具体的なお恵みに思いが縛り付けられ、いわゆる御利益的な信仰から自由になれないことがありはしないでしょうか。今この時の不幸を解決して幸せにすることを売りにする、世に言う幸福宗教のような信仰ばかりに心を奪われることはないでしょうか。もちろん、それらのどれも どうでもよいものではなく、それなりに大切なものであるにはちがいありません。ただ、それらばかりに心が占有され、より深い、もっと本質的で 何にも増して重要な事柄にその思いが向かなくなるとしたら。私たちはそのとき、主イエスの真の恵みから遠ざかり、そしてついには、イエス・キリストというお方そのものから遠い者になってしまうように思われます。具体的な御利益をくれる いわゆる力の救い主しか、それと認められなくなるからです。実際、みすぼらしくもしょぼくれていて、力なく、富も名声もない。見た目の華やかさとはかけ離れた、不幸せの権化のような十字架上の主イエスに神の救い主の姿を見て取ることは容易でないと思います。だからこそ、ユダヤの人々は「つぶやい」たのでした (61)。だからこそ、私たちもまた、心の中で呟くのではないでしょうか。「実にひどい話だ」「そんなの御免だね」と。

しかしながら、イエス・キリストは、そうした見方に囚われ、そうした考え方に縛られた当時のユダヤの人々やこの私たちとは違っておられました。主イエスは違っておられ、主イエスの神は違っておられた。そして、聖書は違っていることを思わされます。その意味で、ですから、自らの意に沿った 自分好みの救い主のイメージから離れること。それを離れ、そうではなく 聖書のそれに目を凝らして、そこでイエス・キリストの目を頂くこと。それが、私たちに繰り返し求められていることのように思われます。

そして、それはほかでもない、みすぼらしくて弱々しい十字架の上のイエス・キリストにこそ、救い主の強さと真実とを見て取ることと教えられます。そもそも、本当の強さとはどういうものでしょうか。西南学院大学の神学部で長年 教鞭を執られた先生に青野太潮先生がおられますが、新約聖書の学者として よく御存じのことと思います。もうだいぶ前になりますが、その青野先生が、使徒

パウロの理解として、（日本バプテスト連盟の）女性連合の『世の光』に次のような一文を記しておられました。

パウロにとってのイエスの「十字架」と「その十字架についての言葉」とは、さしあたっては「愚かさ」であり、「躓き」であり、「弱さ」以外のものではありませんでした。しかし 逆説的には、それこそが真の「賢さ」であり、「救い」であり、「強さ」なのだ、とパウロは言うのです。

つまり、十字架の主イエスは見たところ愚かで、受け入れがたく、弱い者の姿に映るものの、しかし それこそが実は、本当は真理に満ちた、救いをもたらす、強いお方の姿なのだ、と パウロはそう語るわけです。すなわち、見た目の弱さこそが実は真実の強さなのであって、そこにこそ 神の救いの御旨が挫けることなく貫かれている。主イエスはそのようにして、私たちのために自ら弱くなられ、その弱さを挫けることなく強く貫いてくださった、と。聖書の目を持つ者には、これが理解できるように思われます。理解して、受け入れられるのではないでしょうか。

実際、こうした強さは歴史の中にも認めることができます。身をもって それを教えてくれた人たちの姿です。日本の長崎にも縁の深いポーランドのカトリック司祭、コルベ神父（Kolbe）などはその一例でよく知られていますが（聖母の騎士修道院を設立。アウシュビッツのビルケナウ強制収容所で身代わりの受刑死を申し出て、処刑）、そのほかにも、歴史に刻まれた証しは決して少なくありません。例えば、コルチャック（Korczak）という、ポーランドのユダヤ人を御存じでしょうか。コルベ神父と似たような最期を遂げた、もう一人の人物です。医師として、作家として、そしてまた教育者として、ナチスドイツの迫害の時代を生きた人で、最後は 例に漏れず、強制収容所のガス室に送られて、殺害をされました。しかし それは、助かろうと思えば助かったのに、にもかかわらず 自ら弱さを選び、弱い者たちと一緒に死に赴いたものでした。その最期の様子を、『コルチャック先生』という本から御紹介してみましょう。

〔ガス室送りの貨車に〕積み込みが始まろうとしていました。・・・コルチャックは毅然として 一点を見つめています。そのときです。混乱のなかを、ひとりの男が駆けこんできました。手には一枚の紙が握られています。男は人びとのあいだを押し分け、コルチャックを呼び止めました。「ドクター！ ドクター・コルチャック！ あなたは残っていていいのです。貨車に乗らなくてよいのです」。一枚の紙を彼に示します。

子どもたち、ステファ夫人、職員、みんながいっせいにコルチャックの顔を見ます。二百人の凍りつくような視線、放心、不安。コルチャックは、ただ、「私は子どもたちの父親なのです。私だけがどうして・・・」。・・・腰を曲げ、足を引きずり、コル

チャックは貨車に入って行きました。・・・みんな 立ったまま詰め込まれて行きます。ドアーが締まる。悲しみの叫び。

〔こうして、コルチャックは差し伸べられた救いの手を拒絶し、子どもたちと共に ガス室へと向かったのでした〕

ここにも、本当の強さが見て取れないでしょうか。自ら進んで弱さに分け入る、真の強さです。力を振り翳して 人を従わせるのが強さでしょうか。目に見えるビックリをして見せて、それで自分の力を誇示するのが本物の強さでしょうか。私たちの真実の救いは はたして、そうしたやり取りの中にあるのでしょうか。そうではなく むしろ、人のために自身を献げ、自ら痛み傷ついても なお、その献身を貫いて生き切るところ。そこにこそ 本当の強さがあり、一見 弱くは見えるものの しかし実は強さの極みである そうした生き様の中にこそ、真のいのちが満ちるように思います。イエス・キリストはまさに この弱さを生きられたのであり、そのようにして 弱さの中の強さを生きられたのでした。そして、その主イエスは自身を信じる者たちをも同じ強さへと招き、そこへと誘っているように思われます。

しかしながら、弱さの中の強さという、この真理が容易には理解しがたいのも事実です。見える力にしか強さを認めることができない現実です。そして、その延長線上で、そうした自分好みのイメージを救い主に押し付けてしまう。そんな私たちがいることも否めないのではないでしょうか。事実、今回の「弟子たち」もまた そうでした。そして、12 弟子の一人「イスカリオテのシモンの子ユダ」もそうだったことがヨハネの記述から推測されます（70～71）。

71 節にあるように、このユダが最後に主イエスを裏切ることになるのですが、裏切り者のこのユダについては、繰り返し想い起こされる一つの印象的な場面が心に残っています。それは、アメリカの神学校で学んでいたとき、全学のチャペルの時間になされた説教です。モノローグサーモン（monologue sermon）ともドラマティックサーモン（dramatic sermon）とも呼ばれ、通常のそれとは違った形式で行なわれた特別な説教でしたが、一人芝居の独白説教とでも言ったらよいでしょうか。チャペルの壇上に説教者が登り、演技を交えながら、聖書の場面を講解風に独白するものです。レイモンド・ベイリー（Raymond Bailey）という 説教学の教授によってなされましたが、その折の光景は今なお 鮮明に甦ります。それは次のようなものでした。

ユダは実は、イエス・キリストを、当時 ユダヤを占領していたローマ帝国の圧政から解放する解放運動の革命家と考え、その仲間に加わっていました。

しかし、いつまで経っても、主イエスは立ち上がらない。民衆が大挙して後についてきて 蜂起の格好のタイミングが来ても、主イエスは立ち上がらない。立ち上がらないどころか、逆に、この世の王にされるのを嫌っているかのような素振りさえ見せます。そこで、ユダは考えます。「もう、こうするしかない。先生を追い詰めて、立ち上がる

しかないようにするんだ。もう、それしかない」。ユダはそう考え、イエス・キリストを、その命を狙っていたユダヤの当局者に引き渡したのでした。

しかしながら、主イエスはそれでも立ち上がらなかった。それどころか、最後の最後まで、弱いままで十字架の上へと上(のぼ)っていかれた。その最期を知って、弱さの中の強さを知ってか知らずにか、ユダは自(みずか)ら その命を絶ったのでした。

全体としてはこうした内容で、イスカリオテのユダの伝統的解釈の一つに立ったものとも言えますが、しかし この独白説教の中で何が一番印象的だったかといえば、それは、ユダが繰り返し呟(つぶや)いた 次のような言葉にほかなりません。

俺のほうが先生より、神の御旨(みむね)をもっとよく知ってるんだ。
俺のほうが知ってる。先生よりもっとよく知ってる。

そう言いながら、壇上のユダは自(みずか)らその命を絶つために壇を駆(か)け下(お)り、チャペルの席の間を走り抜けるようにして 姿を消したのですが、最後に叫んだその言葉もまた、これと同じものでした。「俺のほうが先生より、神の御心(みこころ)をよく知ってたんだ！ そうだ、この俺のほうがよく知ってた」。それは、主イエスと寝起きを共にしながら、それでもなお 主イエスの言葉をそのままに受け入れることができなかった彼・ユダの姿でした。そのようにして、自分の思いや期待や好みから抜け出ることができなかったユダの姿でした。私たちもまた、自身の好みや願望でイエス・キリストの思いから目を逸(そ)らすことがありはしないか。ユダのように革命運動の指導者に祭り上げることはないにしても、主イエスを自分の色に染め、好みの願いを叶(かな)えてくれるだけの人に貶(おとし)めるようなことはないか。そして、いつの間(ま)にか 自分が主イエスに取って代わり、主イエス以上の者になってしまうといったことが はたしてないだろうか。そんなふうに思わされています。

主イエスは 70 節で言っておられます。「あなたがた十二人は、わたしが選んだのではないか。ところが・・・」。軽々(けいけい)に読み過ごすことのできない言葉ではないでしょうか。私があなたたちを選んだのに、それなのに その内の一人が・・・というのです。これに先立つ 66 節では、前述のように、「弟子たちの多くが離れ去り、もはや イエスと共に歩まなくなった」と述べられてもいました。それが、今またさらに、12 弟子の一人のユダまでもが主イエスを裏切ろうとしているとは。神に選ばれてここにいるのに、それなのに・・・とは、考えてみれば、怖(こわ)い言葉ではないでしょうか。怖くもあり、イエス・キリストに向かう有りようを吟味させられる、襟(えり)を正されるひと言のように思わされます。恵みによって立たされても、それでもなお、御心(みこころ)を曲げてしまうことがある。そんな悲しい自由まで、私たちには与えられている、ということなのでしょうか。

だからこそ、主イエスは言われるのだろうと思います。「命を与えるのは〝霊〟である。肉は何の役にも立たない。わたしがあなたがたに話した言葉は霊であり、命である」(63) と。

すなわち、真のいのちをもたらしてくれるのは信仰の目を通してであって、世の目によってではない。私が語った言葉を通してであり、人の世の願望や価値観によってではない、というように。そして、まさにそのようにして、シモン・ペトロの告白がなされるのでした。「主よ、わたしたちはだれのところへ行きましょうか。あなたは永遠の命の言葉を持っておられます。あなたこそ 神の聖者であると、わたしたちは信じ、また知っています」(68～69)。「神の聖者」とは、イスラエルの人々が呼び名として用いた、勝るもののない最高のものでした。それは、神からのお方であるあなたを信じ、あなたと一緒に歩いていきます、という ペトロの告白でもありました。

何かにつけてしゃしゃり出る癖の抜けない私たちです。聖書の信仰とは、そこから完全には自由になりえない私たちだからこそ 逆に、その誘惑を常にも増して意識し、イエス・キリストをこそ 事の中心に頂いていくことではないでしょうか。そのようにして、私たちの嗜好や都合で主イエスの思いを曲解することのないよう、心を低くして その真の在り処をたずね求めていくことだろうと思います。そのことを、適当にではなく、また上手にでもなく、誠実に真剣にしていくとき、主イエスは確かに この私たちと出会ってくださる。そして、そこで そのいのちを味わわせてくださる、と信じています。その意味でも、イエス・キリストがまずもって息づき、その働きをなされる「聖書」というそのところに身を置くことを大切にしたい。大切にして、そこで 主イエスときちんと向き合いたい、と思わされています。

聖書の、安易にやり過ごすことのできない問いかけが続きました。よりによって「弟子たち」の中から、主イエスのもとを離れ去る者が出る。それどころか、こともあろうに 12 弟子の中からも、主イエスを売る者が出るといいます。それはいったい、いかなることを暗示しているのか。もしかすると、信仰というのは外からの力による以上に 内からのなし崩しによって崩れてゆく、と示唆しているのかもしれません。

ですが、最後はやはり、慰めのメッセージを頂きたいと思います。救いのメッセージを、希望のメッセージを貰えたら、と思います。それは、御自身を裏切ろうとするそのユダに、イエス・キリストは何を どのようになされたか。また、結局 他の人々と同じように御自身を捨てて離れ去ったそのペトロに、主イエスは何をなされ、どのように接せられたか、ということです。

主イエスは、御自身を裏切ろうとする そのユダに、何をなされたでしょうか。ヨハネによる福音書はやがて 13 章に進んで、その様子を記しています。イエス・キリストが弟子たちの足を全員一人残らず洗って、手拭いで拭われる場面です。主イエスは、ユダの足をも洗われたのでした。そして、そこには当然 ペトロもいて、そのペトロの足をも 主イエスは洗われた。そして、言われました。「主であり、師であるわたしがあなたがたの足を洗ったのだから、あなたがたも互いに足を洗い合わなければならない。わたしがあなたがたにしたとおりに、あなたがたもするように」(ヨハネ 13：14～15)。主イエスは、今まさに裏切ろうとしているそのユダに対しても、

最後の最後まで 身を低くして仕えられました。そして、ペトロもまた、同じように足を洗っていただいた。しかも ペトロは、十字架刑の一番大事なときに「**イエスなど知るもんか**」と言って 主イエスを捨て去ったにもかかわらず、それなのに 復活の主はなおも 御自分のほうからそのペトロのもとに赴かれ、そして言われたのでした。「**わたしの羊を飼いなさい**」(ヨハネ 21：15〜19) と。

私たちはいつも このイエス・キリストの慈しみのもとにあることをうれしく思います。私たちの至らなさや過ちにもかかわらず、それでもなお 私たちの前に膝を折って、私たちを顧みてくださる主イエスの恵み。好(い)い加減(かげん)で保身に長(た)けた私たちの現実にもかかわらず、それでもなお 私たちのもとに赴いて、声をかけてくださる主イエスの温かさ。ここに 私たちの慰めがあり、救いがあり、希望があるのではないでしょうか。であればこそ また、そんな主イエスに甘えるがまま、何もせずにいることは、心がなんと落ち着かないことか。自然と 何かをしたくなるのです。

〔祈り〕

愛する神様。

今月は、できれば知りたくないような現実を目にさせられました。どこかに、波風のない 平和で居心地(いごこち)の良いところで信仰を享受したいと願う自分がいるからです。

しかし、聖書の御言葉(みことば)をもって その至らなさに気づかせてくださり、感謝をいたします。

どうか、人の世のそれを超えて 事を見る目を与えてください。素直で柔らかな心をお与えください。そのような目をもって、御子(みこ)イエス・キリストの十字架を見上げることができますように。十字架の主イエスのお言葉を、真意を曲げることなく聴き取ることができますように。どうぞ、私たちの心を耕してください。

恵みのうちに導き また伴われるあなたの顧みを心から感謝いたします。

慈しみの主イエス・キリストの御名(みな)によって願い、お祈りいたします。

アーメン